

## 報告

### 鈴木啓之「大岩川和正氏の研究」

土地とイデオロギー：大岩川和正の現代イスラエル研究を起点として

明治大学駿河台キャンパス 2012年6月9日

私が経験を通じて痛感しているのは、まだその段階〔普遍的な地域論への展望：発表者註〕に至るほど世界各地の実態が知られていないのではないかと、ということである。

(大岩川\_K, 97)

## 1. プロフィール



イスラエルへの渡航直前

(羽田空港にて大岩川敏氏撮影、1966年)

- 1933年1月30日 京都市上京区に生まれる
- 1958年3月 東京大学理学部地学科地理学専攻卒業
- 1958年4月 東京大学大学院入学
- 1959年1月 ヘブライ大学留学（イスラエル政府留学生）
- 1960年10月 留学より帰国。国際基督教大学教育学部社会科学科非常勤助手（～64年3月）
- 1964年3月 東京大学大学院博士課程中退
- 1964年4月 アジア経済研究所に勤務（～71年3月）
- 1966年4月 アジア経済研究所海外派遣員としてイスラエルへ出張  
第三次中東戦争の勃発
- 1969年4月 明治大学文学部兼任講師
- 1971年4月 明治大学文学部助教授
- 1976年4月 明治大学文学部教授
- 1977年1月 アジア経済研究所現地調査員委嘱でイスラエルへ出張
- 1977年4月 明治大学文学部教務主任（～79年3月）
- 1980年5月 鬱血型特発性心筋症のため東京厚生年金病院へ入院
- 1981年4月25日 逝去（48歳）

## 2. 研究に対する評価

### ■■高い評価

#### 経済地理学会編 [1992] (熊谷圭知)

- ・「こうした地誌の理念〔地誌とは、思考と実証の不断につづく螺旋的往復運動によって鍛えられるものである：発表者註〕が具体化した稀有な例として、大岩川のイスラエル研究がある。その遺稿集（1983）にあらためて印象づけられるのは、全編を貫く高い思想性と理論化への志向であるが、それらは、いずれもフィールドとの真摯な対峙から生み出されたものであり、通俗的な意味でのイデオロギーや既成理論の安易な適用という営為からは、最も遠いところにあるといえる」(p.256)

#### 長沢 [1991]

- ・「地域研究としてのパレスチナ研究について大岩川の研究が示した方法論的貢献としては、少なくとも次の二つの点が指摘できる〔…〕。第1は、まさに「パレスチナ」という地域の設定にかかわる問題をめぐって、「イスラエルとアラブの相互関係を除いては、どちらの現代史も成立しない」、〔…〕イスラエルを「ユダヤ史」の線上としてではなく、「西アジア現代史の過程の切り離せない一部を構成する」ものとしてとらえる認識を示したことである。〔…〕第2の「地域研究」として

の方法論的特徴は、モシャーフあるいはキブツという入植村落の実証的研究、すなわちコミュニティ研究を、再生産構造をもつ国民経済に拠って立つイスラエル国家のレベル、さらには世界経済のレベルとの関係の中に独自の形で位置づける研究枠組みを作り上げたことである」(pp.41-42)

## ■■極端な否定

### 足立 [1984]

- ・「パレスチナの逼迫した労働事情も、キブツを生み出さしめた数ある要素の内の一つではあっても、総てではあり得ぬというべきであろう。ここに評者は、人間の資質に目を向けぬ大岩川氏の、意識されざるイスラエルのユダヤ人（シオニスト）に対する偏見を見るのである。[...] 大岩川氏の現地調査に協力を惜しまなかったデガニヤ村やテルアダシム村の人々が、本書『現代イスラエルの社会経済構造』の反シオニズム、反イスラエル色の濃さを知ったら、どんな気持ちがするだろうかと、評者は「研究という名を借りたエゴイズム」と思わないではおれなかった」(pp.154, 157)

## ■■発展的評価

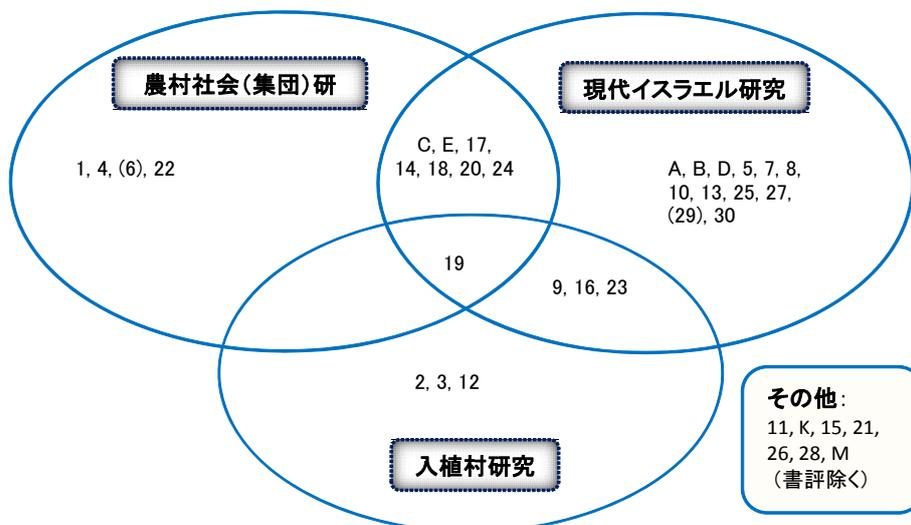
### 丸山 [1984]

- ・「著者の問題関心を、現在イスラエル国家が直面している開発都市——もちろんここにはオリエント系ユダヤ人の問題がからんでいる——、およびアラブ占領地に建設されている入植地——そこにはアラブ人問題、パレスチナ問題など諸々の1世紀におよぶ未解決の問題が入り込んでくる——に適用してみると、著者の今世紀初頭における入植地の研究はおどろくほど新鮮である」(p.47)

### 臼杵 [1995]

- ・「大岩川氏が資料的制約にもかかわらず、大胆に、しかも緻密な論理で迫った、当時のイスラエル社会の核心部分を構成したユダヤ人入植村の研究を、むしろ1970年代以降、イスラエルの研究者自身の間で問題にされ始めた新たな視点から、その可能性を読む[...]。大岩川氏は研究者としての節度を守り、その「欠如」部分[「都市」と東洋系ユダヤ人（ミズラヒーム）：発表者註]をおそらく極めて重要な問題だと（たとえ体系的な問題意識ではなかったにしろ）感じていたがゆえに、極端までに禁欲的な姿勢をとり、生半可な言及は避けたと筆者は考えている」(pp.11-12)

### 3. 研究の方向性：試論としての「3つの方向性とその融合」



## 4. 研究の特徴

### ユダヤ史的アプローチ、国際政治的アプローチに対する批判

- ・「日本における対イスラエル関心は、大きく分けて二つの系譜に由来する。パレスチナ問題やアラブ・イスラエル紛争を焦点とする国際政治、ないしはそれをふくめた近代政治史の観点からの関心であり、もう一つは、ユダヤ史ないしユダヤ文化を広く包含したユダヤ的存在一般に対する関心である。[...] この視点からは従来とかく見逃されがちであった大きな問題が残され、しかもそれが現代イスラエル研究にとっての最大の課題となっている [...]。それは、シオニズム運動全体の歴史的発展とパレスチナに形成され自身の内部に主体的な発展の契機をもつ現代イスラエルの歴史とが、相互にいかなる関連を保ちつつ現在に至っているのか、という問題である」(大岩川\_15, 150-151)

### 「ネイション」の抱える矛盾と現実との相互作用への注目

- ・「ここで見落としてはならないのは、入植村において実現されたと考えられていた「ナショナル」の意味が、変化しているという事実である。西欧系シオニストが前提としていたユダヤ「民族」概念——普遍的な民族概念と特殊なユダヤ人幻想を結びつけたもの——に代わって、具体的なイスラエル国民の概念が全面に登場した」(大岩川\_23, 109)
- ・「[...] 政治主義的な戦略としての入植理念を育ててきたシオニズム政治体制は、確かに初期には入植民と対立せざるを得なかった。イデオロギー的には入植民が主導権をとりながらも、物質的な基礎での両者の妥協はキブツを生み出すことになったが、その間着実に勢力を増大したシオニズム政治体制が、第一次世界大戦後の段階ではほぼ完全に入植活動全体の把握に成功、物質的基盤においてはシオニスト機構主導下の、イデオロギー的次元においては両者の妥協としてのモシャーフを生み出すことになったのである」(大岩川\_19, 25)

## 二重・複眼の視点

- ・「抽象的な見通しだけを付け加えるとすれば、ユダヤ研究とイスラエル国研究、およびユダヤ人問題研究とシオニズム運動研究、という二重の——それぞれ内部の二者のあいだでも、二組のセットの間でも相互に密接に関連しながらしかも位相を異にする——視点が、統一的に体系化され、かつアラブ研究とパレスチナ研究といういま一つのセットとさらに有機的に結合されることが、イスラエル地域研究にとって必要な方向ではないかと思われる」(大岩川\_M, 209)
- ・「私は、地理学の究極の目標を、世界を科学的・体系的に地域社会の視点から説明し記述すること、すなわち地誌の完成であると考えている。[...] 地域研究の必要性を強調する社会科学の他の諸分野の場合には、いわゆるインター・ディシプリナリーな研究が不可能に近いし、また特定地域を世界の他の部分と断絶して扱ったりしがちなのが現状である。その点地理学は、最初から総合性をもった地域そのものを対象化するので個別科学では捨象され易いその地域個有の問題を捉えることができること、またその地域と他の地域との関連を世界全体の位置関係にもとづいて明らかにする視点が貫かれていることによって、地域研究の中で独自の役割を果たせる」(大岩川\_K, 95)

## 5. 考察と展望

- ・「地域としての『パレスチナ』」に関して  
→イスラエル建国以前から今日まで、一貫して当該地域を誤解なく示す用語として適切か検討すべき
- ・「現代イスラエル」における政治的、経済的变化を捉える範疇  
→被占領地に関する考察がほとんど見られないという点は考慮されるべき

Ex) 1974年蜂起の要因は、第四次中東戦争後のイスラエルの経済政策によるインフレへの反対  
デガニヤ出身のモシェ・ダヤン国防相が被占領地政策に強い決定権を行使

・地域研究とディシプリン

→イスラエル研究とアラブ研究（研究の対象）、地域研究と経済地理学（研究の手法）を2重、3重にも絡めることで新たな視点や事実を提示している点は、現在においてもなお驚嘆に値する

参照（一部：大岩川氏に言及、ないし大岩川氏が特に言及した文献のみ記載）

- 足立恭一郎 [1984] 「現代イスラエルの社会経済構造」大岩川和正著——パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究『農業総合研究』第38巻第2号、149-158ページ。
- 板垣雄三・笹川正博・前田慶穂 [1982] 「大岩川和正氏の業績を偲んで」『フィラスティン・びらーでい』第28号（第3巻第7号）、26-27ページ。
- 臼杵陽 [1995] 「現代パレスチナ・イスラエル研究へのプロローグ—故大岩川和正氏の業績に寄せて—」長沢栄治編『中東の民族と民族主義——資料と分析視角——』、1-40ページ。
- 経済地理学会編 [1977] 『経済地理学の成果と課題第II集』大明堂。
- 編 [1992] 『経済地理学の成果と課題第IV集——構造変化する時代の地域視座——』大明堂。
- 故大岩川和正教授を偲ぶ会編 [1982] 『明けつれど——大岩川和正教授追悼録——』（非売品）。
- 児玉昇 [1985] 「現代イスラエルの社会経済構造」大岩川和正著『アジア経済』第26巻第3号、93-96ページ。
- 後藤晃 [2001] 「満州農業移民とユートピア——民族の移植および日本の郷土としての入植村建設——」小林一美・岡島千幸編『ユートピアへの想像力と運動——歴史とユートピア思想の研究——』、125-181ページ。
- 石井素介 [1982] 「大岩川和正教授の逝去を悼む」『駿台史学』第55号、157-160ページ。
- 長沢栄治 [1991] 「中東政治・社会研究における主要な問題領域」長沢栄治編『中東 政治・社会』地域研究シリーズ第10巻、29-73ページ。
- 早尾貴紀 [2008] 「マルティン・ブーバーの共同体論と国家」早尾貴紀著『ユダヤとイスラエルのあいだ——民族／国民のアポリア——』、97-120ページ（初出：『現代思想』2002年7月号）。
- パレスチナ連帯・札幌編 [2005] 『響きあうパレスチナとアイヌ——国境・土地・アイデンティティ——』（非公刊）。
- 丸山直起 [1984] 「現代イスラエルの社会経済構造——パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究」大岩川和正著『歴史学研究』第532号、44-47ページ。
- 山口博一 [1997] 「亀裂と衝突 解説」山口博一・加納弘勝編『発展途上国研究』リーディングス日本の社会学第18巻、127-129ページ。

# 大岩川和正先生著作群

(\*:『現代イスラエルの社会経済構造』に再録/\*\*: 同書の業績一覧に掲載なし)

| No. | 標題   | 収録誌・書籍                                | ページ数    | 年度   |
|-----|--|---------------------------------------|---------|------|
| 1   | 「北海道における農業集落の発展」(ヘブライ語)  | 『自然と国土』第3巻第3号                         | 129-134 | 1960 |
| A   | 「イスラエルの地より」**  | 『地理』第5巻第5号                            | 85-88   | 1960 |
| B   | 「イスラエルの地にて-2-」**   | 『地理』第5巻第12号                           | 66-71   | 1960 |
| B 2 | 「イスラエルの点描」**   | 『地理』第5巻第12号                           | 巻頭, 84  | 1960 |
| C   | 「イスラエルの地にて-3-」**   | 『地理』第6巻第1号                            | 107-112 | 1961 |
| D   | 「ヨーロッパ的なイスラエルとユダヤ的なイスラエル-1-」   | 『地理』第6巻第10号                           | 52-57   | 1961 |
| E   | 「ヨーロッパ的なイスラエルとユダヤ的なイスラエル-2-」   | 『地理』第6巻第11号                           | 57-62   | 1961 |
| F   | 書評「Walter Preuss.Co-operation in Israel and the World.1960—イスラエルの協同組合」** | 『アジア経済』第3巻第5号                         | 82-88   | 1962 |
| 2   | 「キブツの起源をめぐる—考察:パレスチナにおけるユダヤ人入植研究のために」*                                   | 『経済地理学年報』第9巻                          | 18-38   | 1964 |
| 3   | 「キブツの生産構造」*  | 『オリент』第7巻第1号                         | 63-83   | 1964 |
| 4   | 「農業生産の地域的構造」   | 『工業開発の地域構造に関する研究』(日本工業立地センター編)        | 197-293 | 1964 |
| 5   | 「世界のユダヤ人とその問題」   | 『地理』第9巻第10号                           | 28-33   | 1964 |
| 6   | 「世界の農業地域区分」  | 『地理』第10巻第6号                           | 26-33   | 1965 |
| 7   | 「イスラエルのナショナリズム」  | 『歴史教育』第13巻第11号                        | 44-49   | 1965 |
| G   | 書評「Walter Preuss: Co-operation in Israel and the World」**                | 『オリент』第8巻第1号                         | 89-96   | 1965 |
| 8   | 「イスラエル」  | 『中東諸国経済開発の進捗・下』(中東調査会編)               | 313-329 | 1966 |
| 9   | 「イスラエル農村の経済的性格:パレスチナにおけるユダヤ人入植過程研究の視点から」(I)、(II)*                        | 『アジア経済』第7巻第1号、第2号                     |         | 1966 |
| H   | 不明「イスラエル開発研究センター(村落および都市の入植に関する研究センター)」**                                | 『アジア経済』第8巻第2号                         | 67-70   | 1967 |
| 1   | 書評「E.カノフスキー著「イスラエル・キブツの経済」1966」**  | 『アジア経済』第8巻第10号                        | 74-78   | 1967 |
| 10  | 「中東紛争とイスラエル」(I)、(II)   | 『アジア経済』第8巻第10号、第11号                   |         | 1967 |
| 11  | 「イスラエル」  | 『アジア経済』第10巻第6・7号                      | 173-177 | 1969 |
| 12  | 「キブツ・デガニヤ:パレスチナのユダヤ人入植村」   | 『アジアの農村』(大野盛雄編)                       | 271-361 | 1969 |
| 13  | 「イスラエル社会のイメージ:体験に投影された言語文化の現実」*  | 『20世紀文学』第9号                           | 80-95   | 1969 |
| J   | 書評「R.ヴァイツ,A.ローカフ著「農業開発—計画と実施(イスラエルの事例研究)」**                              | 『アジア経済』第10巻第11号                       | 89-94   | 1969 |
| K   | 「海外在住による地域研究の意義と問題点:イスラエルにおける経験から」**                                     | 『経済地理学年報』第15巻第1号                      | 94-97   | 1969 |
| 14  | 「法制面から見たイスラエル共同組合」   | 『アジア農業協同組織研究会報告』                      | 153-167 | 1970 |
| 15  | 「現代イスラエル研究の諸問題」*   | 『オリент』第12巻第1・2号                      | 149-164 | 1970 |
| 16  | 「イスラエルのユダヤ人入植村:シオニズムの政治的基盤として」   | 『地理』第15巻第8号                           | 40-45   | 1970 |
| 17  | 「モシャーヴ・オヴディームの社会経済構造」*   |                                       |         | 1971 |
| 18  | 「イスラエル共同組合に関する一考察」   | 『アジア農業協同組織研究会報告』                      | 221-248 | 1971 |
| 19  | 「パレスチナにおけるユダヤ人入植村のイデオロギ-的基盤」*  | 『駿台史学』第29号                            | 1-26    | 1971 |
| L   | H.パック著「イスラエルにおける構造変化と経済政策」   | 『アジア経済』第13巻第7号                        | 99-102  | 1972 |
| 20  | 「イスラエルのユダヤ人入植村組織に関する一考察」*  | 『アジアの農業協同組合』(滝川勉・斎藤仁編)                | 269-312 | 1973 |
| 21  | 「パレスチナ問題とイスラエル建国」  | 『国際問題』第155号                           | 14-23   | 1973 |
| 22  | 「「過疎」地域の村落における社会構造」  | 『商品生産の転換にともなう「過疎」地域の形成・変動』(石井素介編)     | 126-138 | 1974 |
| 23  | 「イデオロギ-としてのユダヤ人入植村:シオニズム運動展開の一側面」*                                       | 『思想』第603号                             | 93-111  | 1974 |
| 24  | 「イスラエルの農業共同経営」   | 『日本と世界の農業共同経営』(小倉武一編)                 | 179-196 | 1975 |
| 25  | 「イスラエルの政治変動に関する基本的視点」  | 『中東総合研究』第2巻<br>後に『中東 政治・社会』(長沢栄治編)に再録 | 53-60   | 1975 |
| 26  | 「西アジア」   | 『経済地理学の成果と課題』(経済地理学会編)第2集             | 296-298 | 1977 |
| 27  | 「イスラエルの現状を見て」  | 『中東総合研究』第8巻                           | 2-11    | 1977 |
| 28  | 「イスラエル」  | 『中東ハンドブック』(松本重治監修・板垣雄三編)              | 94-99   | 1978 |
| M   | イスラエル(70年代日本における発展途上地域研究—地域編[含 文献リスト]〈200号記念特集〉)**                       | 『アジア経済』第19巻第1・2号                      | 207-209 | 1978 |
| 29  | 「中東問題の核心パレスチナ」*  | 季刊『地域』第2号                             | 74-79   | 1980 |
| 30  | 「イスラエルの経済開発計画について」*  |                                       |         | 1980 |